

東京藝術大学 未来創造継承センター

大学史史料室

(旧制東京美術学校部門)

年報・紀要

令和6年度（2024）



目次

年報.....	2
Ⅰ 組織概要.....	2
1. 業務内容.....	2
2. 沿革.....	2
3. 所蔵資料.....	2
4. 組織・スタッフ.....	3
5. 施設・設備.....	3
Ⅱ 令和6年度（2024）の活動状況.....	4
1. 資料の管理・公開.....	4
2. 社会教育事業.....	5
3. 普及活動.....	6
4. 調査・研究活動.....	7
紀要.....	9
〔資料紹介〕 文部省工芸技術講習所の日誌 浅井ふたば.....	9

年報

I 組織概要

1. 業務内容

- 資料の収集、整理及び保存に関すること
資料の移管・受入、所蔵資料の整理、所蔵資料の保存環境の整備など
- 資料の利用に関すること
資料閲覧、レファレンスなど
- 資料の調査及び研究に関すること
展示、所蔵資料に関する調査、研究会・紀要への論文執筆による成果発表など
- 普及活動に関すること
ウェブページでの情報公開、公開講座の開催、東京藝術大学美術学部の歴史コンテンツ制作など

2. 沿革

1964（昭和39）年6月	美術学部紀要編集のため教育資料編纂室設置 沿革史編集委員選出
1981（昭和56）年10月	東京芸術大学百年史編集部会要項制定
1987（昭和62）年10月	『東京芸術大学百年史 東京美術学校篇 第1巻』刊行
1992（平成4）年10月	『東京芸術大学百年史 東京美術学校篇 第2巻』刊行
1997（平成9）年3月	『東京芸術大学百年史 東京美術学校篇 第3巻』及び 『上野直昭日記』（『東京芸術大学百年史 東京美術 学校篇 第3巻別巻』）刊行
2003（平成15）年3月	『東京芸術大学百年史 大学篇』刊行
2003（平成15）年11月	『東京芸術大学百年史 美術学部篇』刊行 この頃、赤レンガ1号館1階から、芸術資料館2階へ移動
2014（平成26）年頃	大学会館2階の旧大集会室へ移動
2018（平成30）年7月	正木記念館1階に移動
2020（令和2）年1月	美術学部近現代美術史・大学史研究センター設置
2022（令和4）年4月	歴史資料等保有施設に指定
2024（令和6）年4月	未来創造継承センター大学史史料室（旧制東京美術学 校部門）として改組

3. 所蔵資料

公文書等の管理に関する法律に基づき、特別な管理を行なっている歴史的若しくは文化的な資料又は学術研究用の資料を収集・保存し公開している。

区分	資料概要	数量
大学史史料	東京美術学校及び東京藝術大学美術学部の事務文書	1,425点
寄贈資料	東京藝術大学美術学部に関係する個人や団体から寄贈された資料	9資料群 13,004点

※ウェブページで公開されているもの

4. 組織・スタッフ

センター長

大学院国際芸術創造研究科教授 毛利 嘉孝

教員等

学術インストラクター 浅井ふたば

学術インストラクター 芹生春菜

協力研究員

芸術情報センター准教授 嘉村哲郎

5. 施設・設備

施設総面積

年度	合計	執務	展示	閲覧	書庫
2020年	169.1㎡	86.5㎡	13.3㎡	18.2㎡	51.1㎡
2021年	169.1㎡	86.5㎡	13.3㎡	18.2㎡	51.1㎡
2022年	169.1㎡	86.5㎡	13.3㎡	18.2㎡	51.1㎡
2023年	169.1㎡	86.5㎡	13.3㎡	18.2㎡	51.1㎡
2024年	169.1㎡	86.5㎡	13.3㎡	18.2㎡	51.1㎡

専用書庫の機能：空調機有、温湿度計有、除湿器有、施錠有、施設出入口に消火器有、書庫耐震固定工事済。

Ⅱ 令和6年度（2024）の活動状況

1. 資料の管理・公開

1-1. 資料の受入・整理

①資料の移管・受入

寄贈者	主な内容	点数
金子一夫	『一寸』 第92号～第96号	5点
杜の会	美油画クラス会だより No. 36～132	1部

②目録の整備・公表

目録のオンライン公開

・機関アーカイブズ

大学史史料

・収集アーカイブズ

久保田鼎関係資料／上野直昭関係資料／六角紫水関係資料／太村西崖関係資料／斉藤佳三関係資料／三好二郎関係資料／前野まさる関係資料／中村勝馬関係資料／松田権六関係資料

③資料のデジタル化

・「昭和24年6月以降 公文書綴 東京芸術大学美術学部」

・「昭和25年度 公文書綴（一） 美術学部」

1-2. 資料の利用

①資料利用状況

	閲覧室利用者数	問合せ数	資料閲覧者数	画像提供数	掲載放映許可数
4月	33	7 (2)	3 (1)	0	0
5月	32	7 (1)	1	0	1
6月	14	18	2	0	2
7月	15	7 (2)	4	0	0
8月	—	4 (2)	1 (1)	0	0
9月	—	5 (2)	1 (1)	0	0
10月	14	10 (1)	4	0	0
11月	31	9 (2)	4	0	0
12月	15	9 (1)	4	1	0
1月	71	9 (1)	5	0	0
2月	—	1 (1)	0	0	0
3月	—	5 (1)	0	0	0

※（ ）は学内利用者数

②資料活用実績

- ・川下俊文・鶴田奈月・田村隆『第一高等学校と感染症——1904年の腸チフス流行——』科学研究費基盤研究（C）「狩野亨古文書を活用した近代日本の高等教育および知識人交流の調査研究」（研究代表者 田村隆）、課題番号：20K00336、2024年5月31日
- ・「芳国舎の「白鳥の陶器」（高山市） 昭和の名工 修行の置き土産」『中日新聞』2024年6月16日、朝刊、飛騨版、16頁
- ・菅野智明『中国書学と近代知』汲古書院、2024年10月
- ・黒沢義輝『夢の森へ 画家・石田順治の足跡（翡翠叢書6）』黒沢義輝、2024年12月
- ・大内曜「令和5年度コレクション展『動物園にて——東京都コレクションを中心に』報告」『東京都美術館紀要 No. 31』公益財団法人 東京都歴史文化財団 東京都美術館、2025年2月

2. 社会教育事業

2-1. 展示の開催

① 「藝大と絵巻物研究」2024年4月5日～7月28日、田中記念室前室

2024年度は、テレビ放送等を通じて「源氏物語」および「紫式部」への関心が一段と高まったことから、当室では関連資料の展示を実施した。

本展示では、1926年（大正15年）に東京美術学校（以下「美校」）で開講された「特殊研究講義」のうち、日本画家・松岡映丘が担当した「古絵巻物研究」に関する授業関連資料を紹介した。松岡映丘は、1912年（明治45年）の文展において「源氏物語絵巻」を題材とする《宇治の宮の姫君たち》で初入選を果たした。伝統的なやまと絵の表現に近代的な感覚を取り入れたその作風は、「新興大和絵」とも称され、新たな潮流の形成に寄与した。美校では、大正期に絵巻物の模写事業が進められるなど、絵巻物研究が活発化した。

大正15年に開催された「特殊研究講義」は、現在の公開講座に相当する位置づけを持ち、社会人や他大学学生に加え、女学生の参加も見られた。授業関連資料からは、松岡映丘が、源氏物語や紫式部絵巻等に描かれた人物や景色を日本画制作にいかに応用し得るかを検討した研究の一端が確認できた。（担当：浅井）

展示資料

- ・「大正15年4月 特殊研究講義関係書類 東京美術学校」
- ・「大正15年4月以降 特殊研究講義材料ニ関スル書類綴込 東京美術学校」
- ・「大正15年4月以降 特殊研究講義ニ関スル往復書類 教務掛」

② 「芸術未来研究場展」

2024年11月27日～12月3日、東京藝術大学大学美術館

2024年11月に東京藝術大学大学美術館で開催された「芸術未来研究場展2024」において、当室では授業関連資料の展示を実施した。

本展示では、東京美術学校における授業の実態を示す資料として、講義ノートや教材を紹介した。とりわけ、森鷗外が担当した「美術解剖学」および小場恒吉が担当した「日本装飾史」に関する資料など、実際の授業で用いられたノートや図案を取り上げ、教育内容の一端を示した。（担当：浅井・芹生）

展示資料

- ・「美術解剖 森林太郎口述」藤巻直治筆記 明治26～27（1893～1894）年頃
- ・「小場恒吉講義資料」
- ・「日本文様史 小場常吉師」岸澤武雄記 昭和8～13（1933～1938）年頃

2-2. 他機関開催の展示会への出陳

展覧会名	会場	開催期間	資料名
教壇に立った鷗外先生	文京区立森鷗外記念館	2024年4月13日～6月30日	・藤巻嘯月関係資料 授業ノート「美術解剖 森林太郎口述」 ・大村西崖関係資料 慶應義塾教務係より鷗外宛書簡／「美学」講義録／蝸笑消陰録／東京美術学校一覧 従明治24年至明治25年
黄土水とその時代—台湾初の洋風彫刻家と20世紀初頭の東京美術学校	東京藝術大学大学美術館 本館展示室3, 4	2024年9月6日～10月20日	・自明治44年至大正3年 儀式関係書類 庶務掛 ・選科入学関係書類 教務掛

3. 普及活動

3-1. 大学教育の担当

- ① クリエイティヴ・アーカイヴ概説2024 アーティストのためのアーカイヴ
第10回「東京藝術大学のアーカイヴ」（担当：浅井）
2024年10月24日（木）18:00-19:30

概要：

本授業では、「東京藝術大学のアーカイヴ」を主題として、未来創造継承センター大学史史料室の役割と位置づけを紹介した。あわせて、本授業におけるアーカイブズの定義を示し、作品のみならず創造過程や周辺資料を保存し、次世代への継承と社会への公開につなげるという「クリエイティヴ・アーカイヴ」の理念を踏まえ、アーカイブズ資料の特性と基本業務（保存整理・編成記述等）を概説した。

主な講義内容：

- 大学史史料室の説明
年史編纂室を前身とするアーカイブズ施設としての沿革・機能／「歴史資料等保有施設」指定
- 本授業における「アーカイブズ」の定義
アーカイブズ資料・機関の基本概念
- 「クリエイティヴ・アーカイヴ」の理念と授業内での位置づけ
- アーカイブズ資料の特性
資料群という考え方／出所原則・原秩序尊重の原則
- 大学史史料室の基本業務
保存整理（リハウジング、IPMによる保存環境整備）
編成記述（アーカイブズ原則に基づいた整理とISAD(G)に準拠した記述）
- 課題
人的資源の確保と法人文書受入体制の整備

成果：

東京藝術大学におけるアーカイブズの制度的背景と大学史史料室の役割を踏まえ、アーカイブズの定義、アーカイブズ資料の特性、保存整理から編成記述までの実務の流れ、および運用上の課題について、体系的に理解するための基礎的視点を提示した。

4. 調査・研究活動

4-1. 助成研究調査

助成	公益財団法人 鹿島美術財団 美術普及振興（調査研究）
研究課題	松田権六資料の調査研究およびアーカイブ化
代表者	黒川廣子（東京藝術大学大学美術館長）
共同研究者	浅井ふたば（大学史史料室 学術インストラクター）
利用資料	CA013 松田権六関係資料
助成期間	2023～2024年

4-2. 外部研究

利用機関	独立行政法人国立文化財機構 東京文化財研究所 無形文化遺産部
研究課題	無形文化遺産（工芸技術・染織分野）の保護に関する調査研究
代表者	菊池理予（主任研究員）
共同研究者	石原真理（織田きもの専門学校講師）
利用資料	CA009 中村勝馬関係資料
研究方法	戦時期の丸芸・丸技関係資料（昭和17～24年）および文化財保護法制定後の制度施行期（昭和25～29年）を対象に、資料のデジタル化と内容把握・整理を実施。
利用期間	2024年4月～2025年3月
研究成果	菊池理予・石原真理「東京藝術大学未来創造継承センター大学史史料室（旧制東京美術学校部門）所蔵『中村勝馬関係資料』から見た工芸技術保護の実態Ⅱ——統制関連団体の実態——」『無形文化遺産研究報告』第19号、2025年3月、113-133頁

5. 業務日誌（2024年4月1日～2025年3月31日）

4/2	前室展示の設営（展示4/5～7/28）	10/1	「クリエイティブ・アーカイヴ概説2024」授業打合せ
4/5	資料のリハウジング（中性紙封筒への入れ替え）作業開始	10/10	定期清掃
4/11	定期清掃	10/24	「クリエイティブ・アーカイヴ概説2024」第10回授業（学外）
4/30	新制東京藝大部門第1回打合せ	10/25	寄贈資料の受入れに関する打合せ
5/9	定期清掃	11/7	寄贈資料の受入れに関する打合せ
5/14	新制東京藝大部門第2回打合せ	11/11	定期清掃
5/31	資料のリハウジング作業終了	11/20	芸術未来研究場展の設営（展示11/27～12/3）
6/6	定期清掃	11/25	学内資料調査（西洋美術史研究室）
6/11	新制東京藝大第3回門打合せ	12/4	芸術未来研究場展の撤収
6/25	害虫トラップ調査	12/10	定期清掃
6/27	大学史史料室打合せ（大学史授業の開設検討）	12/26	大学史史料室打合せ（学内資料の移管）
7/3	新規受入資料調査（学外）	1/16	寄贈資料の受入れに関する打合せ
7/11	定期清掃	1/20	定期清掃
7/18	新制東京藝大部門打合せ	2/6	定期清掃
7/25	消防点検	3/4	資料のモルデナイベ（脱酸素剤を用いた防カビ・殺虫処理）作業実施
7/29	学内資料調査（美術学部庶務係）	3/6	消防点検
7/30	前室展示の撤収	3/6	正木記念館改修工事に関する打合せ
8/1	所蔵資料調査（学内関係者）	3/11	寄贈資料の整理方法に関する打合せ
8/3	学内展示資料貸し出し	3/17	寄贈資料の整理方法に関する打合せ
8/8	大掃除	3/18	正木記念館改修工事に関する打合せおよび建物の見学
9/9	定期清掃	3/31	資料の保存処置（Bookkeeperを用いた脱酸性化処理）作業実施
9/12	新規受入資料調査（学外）		
9/30	害虫トラップ調査		

紀要

〔資料紹介〕 文部省工芸技術講習所の日誌 浅井ふたば

文部省工芸技術講習所は、戦時体制下の昭和16（1941）年1月、東京美術学校内に設立された産業工芸研究を専門とする講習所である¹。

ここに紹介する文部省工芸技術講習所の日誌は、昭和17（1942）4月と昭和18（1943）年4月に高山で実施された出張教室のうち、昭和18（1943）年の日誌である²。本日誌は、戦時期における産業工芸教育の実践の具体像を示す一次資料として位置づけられる。記録には、日々の作業内容や指導の様子に加え、現地の産業との関わり、生徒の生活の様子などが簡潔に書き留められている。

昭和18年度の出張教室では、生徒8名が陶芸組と木工組に分かれ、高山の産業と連携しながら産業工芸を実地研修のスタイルで学んだ。日誌は、4月13日～5月16日までを引率者である中田満男が、5月17日～7月15日までを藤本能道が記録している。なお、日誌は途中で終わっており、いつまで出張教室が行われていたかは不明である。

凡例

- ・翻刻にあたっては、漢字は原則として新字体に改め、仮名遣いは原文のままとした。
- ・原文の漢数字は、読みやすさを考慮し一部を算用数字に改めた。
- ・原文中の誤字脱字は原文のまま記載した。
- ・改行については原文を尊重し、そのまま反映した。
- ・句読点のない箇所には、読みやすさを考慮して適宜補った。
- ・執筆者による補足は、〔 〕で示した。
- ・判読不能な箇所は、■で示した。
- ・日誌の罫線外に記された追記部分については、フォントサイズを小さくして示した。
- ・日記の記述のうち、授業とは無関係な個人に関する情報は省略した。

¹ 文部省工芸技術講習所の概要については、『東京芸術大学百年史』東京美術学校篇（第3巻）、文部省工芸技術講習所の設立背景を含めた考察は拙稿「文部省工芸技術講習所と東京美術学校」『東京芸術大学美術学部紀要』を参照されたい。

² 昭和17（1942）の日誌の書き起こしは、拙稿「文部省工芸技術講習所と東京美術学校」『東京芸術大学美術学部紀要』を参照されたい。

昭和十八年度（四月十五日ヨリ 月 日マデ）

岐阜県高山市 出張教室日誌

工芸技術講習所

高山市出張教室日誌

四月十三日 火 小雪降り寒し

今年度も高山出張教室の計画実現を見、小生生徒に先立て13日午後高山に着す。

ただちに今年度宿舎として予定されたる正雲寺に打合せのため立寄る。先般小生来高打合せしたる場合の約束に対していまだにそのままの有様にて畳の如きも何等手入れをさなれず、炊事場の設備も不完全にて若しこのままの状態なれば、或は生徒に対して失望不満を感じぜさずやも知れずと思考されたるにより、市役所或は商工会と打合せ相談の結果、先年通り保寿寺を借用し、山下旅館にて食事をなす事の方、万事都合よろしからんとの事にて、直ちに保寿寺、山下旅館に了解を得て決定す。

四月十四日 水 小雪、寒し

個人として各方面に挨拶をなす。

堀吉郎氏訪問の際、次の如き話し出でたり。即ち最近堀氏の工場を会社組織となしたるため一応社長に対して工場使用の了解を学校よりつけられたきとの事なり。ただ一応了解を表面上つける訳にて他は別にむづかしき事もなく工場使用其の他には心配の事なきとの事故、小生社長に面会して御願申す事とす。

工芸指導所恩田氏いまだ病氣との事、この点一大打撃と云ふべし。

松山氏旅行中にて今日も面会し得ず。

四月十五日 木 快晴ナレド寒シ

午前中山下旅館のおばさんと共に保寿寺の室を大掃除をなす。

2時04分生徒一同元気にて着高、ただちに山下旅館に至り今日は高山祭なれば心づくしの赤飯を頂き休息の後、祭り見物に行く。

夜は旅のつかれにて一同早寝寒き事甚だしく風邪なき様注意す。

四月十六日 金 晴

午前中公会堂より机椅子拝借して、各自の席を作って落付く。

午後は木工指導所と洪草窯、田中松祐斎氏工場、堀吉郎氏工場に挨拶を兼ねて工場を見学す。

夜松山氏に初めて面接を得て、色々打ち合せをなす。

施設の窯に付いては多治見より職人の来るを待ちて着手、作業場もそれと並行してなるべく早急に現実を見る様に配意す。なほロクロに着手してからの勉強方法は先年の如くあまり自由を認めず、一定の形式の中に各自の自由を生かす方法、例へば第一に皿造りの技術の修得、次は鉢物造り、次は袋物造り等と云ふ様に一定の階段の順序を取る方法よろしからんとの事なり。

なほ材料等に付きては、十分に注意して粗末なき様との申入れもありたり。

四月十七日 土 快晴なれども朝夕寒気強し

午前中飛騨木工会社と飛騨輸出玩具工場を参観す。

飛騨木工会社は現在軍工場として其の全機能を其方面に集中して其の間にスキを見て椅子の制作をなしつつある現象なり。然し今後池之端氏及研究部主任小島氏等出来得るだけ生徒の便宜を取りはからふ故利用されたしとの申入れあり。ことに廃材を用ひて玩具の制作をなしたきとの事故生徒に試案試作さす事を約す。

飛騨輸出玩具会社は別に特色ある会社と云ふ程でもなく其の間あたりの製作をなし居る程度なり。午後は自由行動を許す。一同快晴に美しく輝くアルプス連峰のスケッチ、或は植物写生等各自に行動す。

小生は堀吉郎氏の工場使用の了解を得るために社長養谷清太郎氏に面接す（学校より公文書にて依頼する必要あり）。

夜は寺にて雑談、10時就寝す。

四月十八日 日 快晴

今日は一日自由行動を許す。但し木工組は（松村、佐々、古藤）午前中道具の手入等のために指導所に行く。

なほ松村、佐々、古藤の三名に千巻の製作上の注意及び挽物の製作上の注意を調査さす。

夜は一同参集をもとめて、今までの見学による予備知識を基として、今後の計画及各自の希望を聞く。

松村——希望としては木工を主体とすれ共、自ら手を下して製作するよりも委嘱製作の方法にて、出来上りを監トクしたきとの事、なほ挽物の或程度の修得、時間の許す限り陶器もやりたし。

佐々——主なる希望は木工を主となし、ことに陶器と木工の結び付によるセット風のものの、考案を主となし、其の陶器の簡単なるものは自分で作って見て陶器の勉強を兼ねる様な方法を取りたしとの事。

古藤——木工の中でもことに挽物を主となし、又今まで自信で研究せるクリ物と挽物との結び付き又クリ物としても木材の豊富なる高山に於てより一層研究を進めたき希望、なほ殊に千巻に付いても研究したきとの事。

大島——希望とする所は陶器の絵付が七分、ロクロは三分と云ふ様な勉強の方法を取りたきとの事。そのためには渋草にある色々な形体に対して絵付けをする方法等も出来得るだけやって見たき希望。其の他曲子により小工芸品の研究。

江頭——陶器を主として勉強する事とし、ただ絵付けする事はすでに或る程度やって来て居るので、形体に対する勉強を重ねる目的としてロクロを主としてつっこみたき希望。勿論自分の成形せる形体に対して絵付けする事により形体と文様の研究を進めて行き度く、又釉の配合等化学的な勉強を希望す。指物の図案製作をなして委嘱したし。

石毛——重なる目的は陶器なるもロクロよりは絵付けの勉強を主としたき希望なり。そのために渋草にある色々な形体を與へられてそれに絵付けする方法を望む。なほ共に千巻と玩具の委嘱製作もなしたき希望なり。

井波——ロクロ、或はイコミ型の方法により形を造る事を主として勉強したき希望。なほレリーフの方法も勉強したし。他に千巻其の他の木工品に対しても高山の特殊事情による一切を考慮して製作したき希望。

横山——井波と同意見なり。

其後、佐々、松村より千巻と挽物との調査報告あり。明日より申合せたる目的に向ってあくまで自主的に勉強する事を申合す。

四月十九日月 雨寒気割合にうすらぐ

午前中寺にて図案制作をなす。午後雨中を渋谷に生き丸皿と角皿各二枚づつを松山氏より分けられて下絵付の練習をなす。4時雨中を帰途につく。

松山氏より電話あり。小屋は入手する事に決定し天気になり次第人夫により取りこわしを初むとの事なり。

四月二十日 火 快晴

午前中寺にて図案製作。

午後渋谷に行く。

生徒絵付けのむづかしさをしみじみと感じ、植物写生と文様校正の不足を今更の如く知りたる如し。

松村〔空欄〕のため帰京。

四月二十一日 水 快晴

午前中指導所に生き代情氏と会ひ木工の方の助手として委嘱する職人の事につきて打合せをなす。

実は職人が日給5円を要求して居るとの事。代情氏は少し高いとは思ふ故4円程にはする様に云って見るが、かりに5円としても使ひ様によっては高くないのでないか。かりに洋服ダンスが一本で職人一ヶ月分の日給が出る、しかも職人は一ヶ月に5個はダンスを作る、となると実際の結果とのバランスで高くはないと思ふ。そんな風に職人を使ふ方がよいと思ふ。かりに生徒の委嘱製作を20個として1個10円としても200円。その点から云っても高くはないと思ふとの事。

実際にもっともの考へと思ふ。一応書面で学校の方へは了解付けて置く必要ありと思ひ、津田先生あて書面を差出す。

午後は渋谷に行き絵付けをなす。松山氏と色々挨拶をして当分工場のロクロがあいて居るから使用する様にとの事なれば明日より御願する事にする。

四月二十二日 木 快晴 暖し

午前中は寺にありて木工の図案制作。

午後渋谷に行く。

窯造の職人突然に来る。松山氏企業整備の事によりて清見に出張中不在故、当日は休養してもらふ事にし、宿舎の事に付いて松山氏（弟）と挨拶の結果、且つて松山氏の窯を造る時も一人女をたのみ炊事をして工場の前の（我々が絵付をなしつつある）別棟の一室に起居してもらいしとの事。女其他については松山氏が心配して頂く事とし、然し一切の準備

のととのふまでの二三日間は食事其他について松山氏（弟）の方をわづらはす事に御願する。又役場より一切の配給を頂く事も帰途役場に立寄り御願する。

四月二十三日 金 快晴 暖

早朝小生一人渋谷草に行く。窯造の職人達はすでに其の仕事に着手しあり。
タレ造と云ひて〔形を示す図あり〕の如き形の大なるものは 高サ・横・厚サ〔空欄〕、
小なるものは 高サ・横・厚サ〔空欄〕のものを厚石を割りて得たる土と附近の山の土と
を混合したる材料にて製作するなり。ここ3・4日はこの準備の仕事なる由、10時一旦帰寺
して、午後は堀氏の工場に佐々、古藤の仕事を見に行く。
次いで渋谷草に廻る。

四月二十四日 土 快晴 暖

早朝渋谷草に行く。鳶職一名、大工一名小屋移動のために今日より仕事初む。
窯造の方も〔空欄〕の■■こと増加す。一応帰り、午後生徒と共に渋谷草に行く。途中小生
のみ松村検査を終へて帰高する■■駅に迎へ荷物少ければ一応宿舎まで同道す。松村は堀
氏工場に、小生は渋谷草に行く。
松村、小生■■より卵とつくだにをことづかり帰る。

四月二十五日 日

城山の桜少し色付き実に快晴の日曜日なれ共、取りこわしたる家の柱、板等の運搬に生徒
を動員し一日中勤労奉仕をなす。
文句も云わず一同良く仕事をなし全部運搬し終る。
其間鳶職は地行をなし、大工は木取りをなす。
窯の職人もタレの数多数になり、両方の仕事実に順序よく進行す。
夜は生徒慰労の意味に於て夕食後町に出て一杯のみ楽しく談笑。つかれも忘れ寝に付く。
チブス予防注射第一回目（7人）佐々、大島、井波風邪にて薬をもらふ。

四月二十六日 月

午前中生徒は寺にて図案製作。小生一応早朝渋谷草に行きて職人の仕事を見る。作業場の棟
上げ終る。
午後、堀氏工場に顔を出し渋谷草に廻る。大工たりない、材木を書き出してなんとかしてほ
しいとの事故、すぐに県の木材会社に行き特別配給の手続をなす。

四月二十七日 火

午前中渋谷草組は寺にありて図案製作、木工組は朝より出勤。小生午前中一応渋谷草に行きし
職人の仕事を見る。帰途県木に立寄り早急の配給を願ひたる所、県木としては今の所すぐ
配給する事が不可能故、小坂製材に渡りをつけて差上げるから訳を話して頼んでみよ、小
坂が引受けてくれれば、手続き其他は大目に見るとの事なれば、すぐ小坂製材に行き依頼
した所、思ったより手易に引受けて呉れ、29日までに必要の木材を製作なし呉れるとの事
にて安心す。一応寺に帰り生徒と同道にて渋谷草に行く。
窯職人の依頼にてこわした窯の材料を運搬す。
なほ窯職人の炊事は手伝女の無きまま松山吉之助氏に引続き御厄介相かけ居りしが、今日
絵付け職人の吉川氏の家内が炊事を引き受け呉れる事に決定。

丁度役場より下付ありたる切符類一切を吉川氏に渡し、なほ当座の買物費として10円手渡す。なほ大工、釘不足を訴ふ。小屋をこわしたる時の釘は大切に小生と石毛とにてのばして使用したるも、それだけにてはたりぬとの事で、大工にどこへもらいに行けばよいのかと問へば、大工は現在高山中に釘のある所はないでせうとすまして居る始末にて、小生実に困却す。

然し或は、飛騨木工に訳を話して頼めばと急に思ひ付き、すぐ自転車をとばせて木工会社に行き願ひしに、会社としても血の一滴の如き釘なれど二百匁程なれば差上げるとの事。三拝九拝して頂きて帰る。

四月二十八日 水 快晴 夜半ヨリ曇

午前中より一同にて煉瓦を運搬、相当の勤労奉仕なり。

午後は運搬をやめて各自の仕事をなす。

窯地行をなし築き初む。

チブス予防注射第2回目。

四月二十九日 木（天長節） 朝の内雨午後快晴

午前中図案製作。

午後釉かけをなしに渋谷に行く。小生私用のため4時過ぎに渋谷に行きたるに井波一人にて他は釉かけのみしてすぐ帰る由。小生寺に帰りたるに早く帰りたる連中はスケッチするのでなく唯単に花にうかれ居る始末にて、実に齒がゆく感じれば、夕食の時に「高山に遊びに来て居るのではない。少し自分で進んで勉強する気を作ってもらわなければ困ると」文句を云ふ。

四月三十日 金 快晴少し雲多し

木工組は指導所、堀工場に行く。渋谷組は朝から渋谷に行く。

今日は支払日なれば

大工手間 40円80銭、10円50銭 計51円50銭

障子代 10円50銭也

窯築用青竹 3円也

材木代 101円30銭也

鳶手間 28円也

を支払ふ。

五月一日 土 快晴

木工組は午前中指導所に、渋谷組は渋谷休電日なれば自由行動とす。

小生は井波と同道絵付に行く。

夜渋谷の今井氏寺に來訪さる。一同と共に工芸論に夜の更くるを忘る。

チブス予防接種第3回目。

五月二日 日 快晴

木工組は指導所と堀工場、渋谷組も朝より出勤す。

窯火入れをなす、見学す。

大工今日は都合にて休み、鳶職のみ仕事をなす。

窯の製作も■こと進み、七分通り出来る。天気上この都合にて進みも早かりしとの事なり。

夜は菓子配給ありたり。

五月三日 月 快晴

木工組は指導所に、渋草組も窯場に午前中より出勤。

大工今日も休み、鳶職は2名。窯場も大体、釉造りも出来、火口を築きつつあり。

松山吉之助氏よりイコミの型造りについて説明を聞く。イコミの練習のため今日より絵付けと平行して高さ8寸の花瓶の型の図案をなさしむ。図案の出来次第イコミの型を作り、実習をなす事とす。

午後は指導所に行き代情氏と立合の上、生徒図案を見る。大体材料の見つもりをして近日より実際の製作にあたる事とす。宮川氏にも塗の物について御配意を得る様御願す。

後、堀氏工場に廻り図案を見せて注意を聞き、材料を取りそろへ、生徒の工場に来る時間割を定め、又生徒自身の出来ないものは堀氏或は他の工場の人を休日等を利用して委嘱する事にする等、今後の一切の手筈を決定す。

夜は8時頃より渋草へ窯たきの見学に行く。

五月四日 火 晴曇多し

各自の職場に早朝より出勤す。

鳶職2名、大工はいまだ出でず。

窯も火口出来上り、火前のアーチ形出来、少しは窯の形をなしたり。

鳶、窯の屋根の柱立てをなす。

渋草組の生徒は3時頃より松丸太の運搬に勤勞奉仕をなす。

五月五日 水 朝より曇、夜に入りて雨

今日は県社の祭例なり。

例の如く二手に分れて早朝より出勤す。

渋草は窯出しなり。生徒は自分の作品の出るのを胸を高鳴る思ひにて待ち、さて出たのを見て悲喜交々たり。

木工のロクロに用ふ材木、桐野製材より入手（朴厚サ3寸・横8寸・長サ4尺を2本、トチ横9寸、厚サ3寸、長サ7尺1本）。

夜は一同にて活動に行く。

付記

実は窯を築く事或は作業所を作る事が最初に松山氏の話しの如く簡単に行かなく、大分の予算が入用の様な事の成行きとなり、小生としても学校に対して困った立場となり、内心心配しつつある次第にて、高山にて金として少し出す人がないか心配してほしいと代情氏に頼みたるに、今日日下部礼一氏が大体承知した故、一応面接する様にとの代情氏よりの通知に接す。

五月六日 木 朝雲あれど後半晴

両方に分れて元気に出勤す。

窯の屋根に使用するヌキ50本、六分板10坪、早急に必要との事なれば小坂製材所に行き、特別の配意をたのみ、生徒の手で運搬す。

ロクロは或る程度進歩を見、次にケズリの練習をなすために毎日の作上げた中の3個程を残す事とす。

夕方帰りには屋根出来、瓦を上げるのみとなる。

夜、日下部氏を訪問す。

寄付に就て御配意を願ふためなり。日下部氏の考へは、牧野良三氏に寄付を御願するとの事にて、早急に日下部氏より書面を差出し下さるとの事。なほ小生帰京後、早急に牧野氏に会ひ御願する事とす。

五月七日 金 晴

渋谷にて午前中2時間程瓦を運搬す。大工今日より出勤す。

窯二段目も完成。

今井氏より窯作りの人達の意気を聞く。即ち窯作りの人達は美術学校の中の工芸技術講習所であるから日本の最高の学校の窯である以上、大きな責任と熱を持って仕事にあたり居るとの事なり。

古藤検査のため上京。

五月八日 土

ロクロに必要な材シナ材長サ7尺・横7寸7分・厚サ3寸一本と横8寸・長サ7尺・厚サ3寸一本を桐野より買入れる。

午後指導所に廻り木工組の実習を見る。

代情氏に日下部氏と面接の結果の報告をなす。

五月九日 日

午前中渋谷に日下部氏来訪さる。早めに渋谷を切上げ。

3時頃より自由行動を許す。

五月十日 月

今日は渋谷の人達はハイキングなれ共、我々の仕事の出来る様にして頂いてあるので出勤す。小生は木工組と共に堀氏工場に廻る。

堀氏の話にて、3坪程の仕事の出来る室を建まし2台程ロクロの機械を置いて専用に勉強したらどうか。むしろそうしてほしいのだがとの話しにて、私個人としては大変結構であるが一応学校の意向を聞いて返事をする所、学校の意向を会計上の事で聞くのなれば、金の事は心配いらない、来年でもいつでも払いこんでもらへばよいと思ふ。養谷氏も其の意見だかえあ一度至急に面接してほしきとの事なり。

其の足にて渋谷に廻り、6時頃一同と帰る。

五月十一日 火 快晴少し寒し

朝学校へ報告を出すために寺に残る。所長、津田、山崎両先生に一切の報告をなし、予算超過の了承を得る様に御願する。

11時頃渋谷に廻る道すがら十六銀行に養谷氏を訪ねしが不在。そのまま渋谷に行く。

窯完全に出来上る。

12時少し過ぎ七日町より出火30軒程を焼く。

堀氏洪草にわざわざ来訪されて、今晚7時頃蓑谷氏や他の株主と面接してほしいとの事なり。

帰りて約束の場所に行く。蓑谷氏、堀氏、三川氏、田辺氏と会ひ、ロクロの作業所の問題に対して腹を割っての話しありたり。

堀工場を将来もっと拡張する計画に対して、今の所学校の工場を建てる事に便乗して少しでも拡張する事が出来れば幸なりとの事。又金の問題に対しては、先日、堀氏の言葉の如く心配なき事、又将来の工場対学校の相互の利用し合ふ事等について、実に太腹な、又理解ある話しにて、願ってもなき事なりと考ふる。学校に帰りて、一度了承を得る所存なり。

五月十二日 水 快晴

今朝9時堀氏工場に会社側の人達と拡張に対しての相談ありたるに立合ふ。

一応、警察の方に意向を聞く必要ありと思ひ、小生経済部長に会ふ。口頭のみにて可許を得たれば、帰りて報告す。

電力の点も日下部氏に御願する。大体に問題なく現実を見るらしき見通しなり。

古藤帰高。

夜今井氏寺に来る、9時頃警戒警報発令。

五月十三日 木 快晴

例の如く両方に出勤す。

洪草で大体イコミの原型出来上る。

夕方木工の方もサービス盆を出来上げて持参す。着々と製品になるを喜び一同にぎやかなり。

五月十四日 金 快晴

藤本午後2時着の汽車にて来高す。

夜今井氏来訪、一同にて色々な話しににぎやかなり。

五月十五日 金 快晴

藤本同道にて諸法に挨拶に廻る。

今日は洪草は休みなれば、生徒は午前中吾々の挨拶廻りのすみたる後、日下部氏宅を見学さす。後、川原町の紙屋を見学さす。

木工組は午後から堀氏工場に出勤、洪草組は自由行動。

小生荻原の生家に3時発汽車にて帰り夜10時着にて帰高す。

五月十六日 日 雨

朝10時頃より久々に雨なり。

洪草組は藤本引率して出勤。小生午前中指導所に廻り、代情氏に今後一切を御願申し。

午後洪草に行き別れの挨拶をなす。夜は藤本と今後の打合せをなし、雨の音を聞きつつ高山とのしばらくの別れの夜を寝る就く。

約一ヶ月余、小生としては出来だけの努力をしたつもりなるも、予定の如く一切が達せられなかった事を残念に思ふ。唯生徒は実によく勉強し、又先年の生徒の経験もしなかった

勤労をもさせたるに対しても不平とてなく、小生の言ふ事をよく聞いてもらった事は高山を去るに就いても思ひ残す事がない気持である。
加藤氏より来信、6月10日―15日頃に来高との事。

五月十七日 月 曇後晴

本日より自分の受持となる。

去年は生徒として来たので気楽であったが、今年は何か責任を感じて気が張る。

午前9時8分の汽車で中田氏が帰京するので、一同で見送る。

木工組は指導所へ行く。午後から古藤のみ堀氏工場へ行く。

渋草組はそれぞれの仕事をなす。其の間昨日より土捻機に掛けてあった土を吉之助氏に頼みはずしてもらふ。量46貫900、私が来るまでに30貫500合計78貫400の土をもらった事になる。午後試験釉薬を皆分扱してすり、もらった皿にかける。

中田氏と共に市産業課に行き、松山氏より窯築職人の爲にかりた木と炭をかへすため切符をもらふ。

五月十八日 火 雨後曇

例の如く両方に出勤。

渋草は松山氏の方の窯詰めがもうそろそろ終りに近づいてゐるので、試験釉の釉掛を急ぐ。松山氏より作業場の配電について電気会社の人に誰か会ってくれとの事により、夜、町にて日下部、岩瀬両氏に会ひ、その事をつたへ頼む。

五月十九日 水 曇後晴

朝、市役所に行き、生徒の移動報告書を届ける。体力検査の件も届け様と思ったが、係の人が未だ出勤しておらず、そのまま渋草へ行く。釉試験体を窯に入れてもらふ様たのむ。新聞記者の来訪あり。

五月二十日 木 曇後晴

朝より寒さを感じず。

木工組は仕事の都合上手が空いたので、午前中一緒に渋草に行く。

小生は生徒の体力検査の件に付き市役所の相談に行く。検査は八月の予定との事故、届を出さず。もし予定が七月前になった場合は臨時に届を出して受ける様にきめて、渋草に行く。松山氏より仕事場の資材の件につき相談を受く。釘が少なくなったとのこと（こうゆふ事になると私は中田氏と違って土地の事情に不案内なので大いに困る。）

佐々が午後より木工の助手の職人を早く来てくれる様に、と催促に行く。

吾々の窯の方は今度が初窯の爲危険をともしなふ故、松山氏の方からは品物は入れてくれないとの事を生徒より聞き、吾々の作るものばかりではとてもあの窯は一ぱいには出来そうもない様な気がする。中田氏は簡単に六月初めに一度焼く様に言はれたが、私は其の時は勿論初めの話の様に松山氏の方の品物も入れてもらへるつもりで「そうですね」と返事をしてゐたのだが、こうなると、生徒は今の所小さなものを一日にわずかししか作る事より出来ず。鑄入の型の方もなかなか思ふ様には行かず、結局私が何でもかまはず出来るだけ大きな物を多く作って生徒に図案でもつけさして窯を詰めるより他になく、私とても十分な事は未だ出来ず、その上、雑用に遅れこの分で行くと終りまでに一度焼ければよい方だと思はれていささか悲観の形。

昨日あたりから大いに生徒に馬力をかける様に注意をし、自分でも出来るだけ造る様に努力をしてゐるが、一日に花瓶を六ツも七ツも引くのでは青息吐息だ。

本日の新聞に左記へ出づ。

〔新聞切抜の挟み込みあり〕

五月二十一日 金 曇後晴

市役所産業課に渋草作業場の資材の件につき、北沢氏に相談に行くも北沢氏東京出張にて不在。

木工指導所に代情を訪ね木工助手の職人の件を相談し、釘を200匁程都合してもらふ様話す。小坂製材所に行き、渋草作業場資材不足の物を後大工が取りに来た時渡してくれる様たのんで渋草に行く。

午後大工材料を運搬して来る。

五月二十二日 晴

例の如く両方に出勤。

粘土の残量を見るにもう大分少なくなつてゐるのに気付く。この調子では粘土を多く私用しすぎる様に思ひ皆に注意し型の悪るい物はこはして土にもどす様注意するも、皆未だやっと造つてゐるので惜しがってなかなかこはそうとしない。明日全部の仕上げした物を点検して仕上げてもしかたのないものは土にもどす事にする。

石毛を指導所にやり、昨日たのんで置いた釘をもらつて来させるも大工本日は来ず。

石膏型は横山の他は皆出来る。

五月二十三日 快晴

木工組桐野製材所より材料を運搬ついでに高山製板より請求書を取ってくる、合計205円42銭也。

渋草組本日までに仕上げせる茶碗皿類の小物をすべて点検して不出来の物をすべてこわさす。一人あたり大体6個ぐらいにまでに制限し他を土にもどさし、削りかす共に水につけ、吸いがめに上げ、天日に乾かす。

五月二十四日 月 雨

松山氏、作業場配電に関し電燈会社に行く。話しに行違ひあるらしく要領を得ず、もう一度日下部氏に会ひ聞いてくれとの依頼により、夜日下部氏宅に行き、よくお願いして来る。

松山氏の方の窯焼き今夜終了。

五月二十五日 火 雨

平常の如く両方に出勤。

桐野製材所より請求書を取つて来る。

合計 54円12銭

前日の高山製材所の請求書と共に同封中田氏宛発送。

五月二十六日 晴

木工組堀氏工場。

洪草組は通常の如し。

松山氏の方の窯出し釉の試験体を依頼してあったのが焼上って出る。

白釉の試験は大体見当のつく丁度に成功なるも、天目系釉は焼けすぎて失敗気味。加藤先生の命令では一つの釉について三個の試験体を造り、弱火強火中火に対して試験する様にとのお話であったが、試験体を中田氏の時に造っておいてくれる様にたのんでおいたのだが、都合により出来てゐなかつたので、松山氏の方から皿をもらって試験体とした爲、皿の数が少く、一種について一個しか出来ず、大体窯の中頃に入れてもらったが、完全な試験はなし得なかつた。

夜加藤先生よりお葉書をいただく。青磁釉についての試験のご教示あり。

五月二十七日 曇後晴

朝市役所産業課の北沢氏に会ひ松山氏より借りてゐる釘を返す爲、都合していただく様たのむ。

洪草組昨日土捻機にかけねり直した土が出来てゐたので、はずして皆ロクロを引く。土捻機、ロクロ工場のあと仕末等皆の態度が多少放漫なので小言を言ふ。

自分達去年の生徒の比較して、今年の連中は多少、自治性に乏しい様に思はれる。去年は後始末や粘土を大切に作る事等は指図されずにやったのだが、今年はなんでも言はなければ、又してやらなければやらない様な所がある。

中田氏より手紙あり。

五月二十八日 曇

木工組、堀氏工場。

洪草組は例の如くロクロ。

五月二十九日 雨後晴

朝木工組と一緒に堀氏工場に行き作業状態を見、後洪草に行く。

鑄込みの型を吉之助氏乾燥室に入れて置いてくれる。

今まで出来た物の中素焼出来そうなものを大体点検。

五月三十日 曇

木工組、松村は指導所、佐々、古藤は堀氏工場。

洪草組は例の如く作業。

仕上げ乾燥ずみの物を松山氏の方の素焼へ一緒につめてもらふ。

夜、医師中村氏より線巻きの原型に使用する石膏を略小袋に二つ程、松村行きもらって来る。

中田氏より手紙あり。

五月三十一日 曇

朝出がけに北沢氏に会ひ釘を来月に入ってもらいに行く事を約束、洪草に行く。

木工組中、松村午後より線巻の原型を造る爲洪草へ来る。

夜アツ島の全滅の状況を新聞でくわしく知り、皆息消沈す。

六月一日 晴

逐に六月になつてしまつた。

今日は渋草は工場の方が休みなので、渋草組は午前中は大掃除、後は自由行動をゆるす。
木工組は前々からたのんであった助手の職人が来ると云ふので指導所へ行く。
小生木工組と一緒に指導所に行き、代情氏と共に職人に会ひ、図案を見せ打合せをなす。
職人は七日三十目、中舎廣丸。

六月二日 晴

木工組は職人が時間通り出勤する爲、本日より時間割を定め三人のうち限らず一人は指導所へ行く様にする。

小生渋草へ行きがけに市役所産業課に行き、北沢氏に会ふ。

渋草、松山氏の方の素焼と一緒にに入れてもらって置いたのが焼上がって出てゐる。
裂れたもの略なく結果良好。

六月三日 雨

例の如く両方へ出勤。

大島、4,5日前より血膜炎にて眼を悪くし、中村氏に看てもらつてゐたが、今日は大分
いたがつてゐたので、赤十字病院へ行く事を進めて行かす。看てもらつた所、しばらく休
養した方がよいとの事。

六月四日 雨後曇

昨夜より井波風邪気味の様子であつたが、今朝頭痛がすると言ふので、今日一日休養を命
ず。松村腹痛にて熱気味なので同じく一日寝てゐる様に命じ、佐々に昼、中村医院に行き
薬をもらつて来てくれる様たので、渋草に出かける。

夕方帰つて来て見ると二人共、元気になつてゐたので安心する。

皆そろそろ疲れの出る頃かも知れぬから用心せねばならぬ。

六月五日 晴

例の如く渋草に出動。

渋草、又削りかすの土がたまつたので、水につけ、吸がめに上げる。午後より鑄込みに取
りかかる。皆型の造り方が粗雑な爲、生地が荒く、これでは仕上げが大変だろうと予
想される。

木工組は夜、線巻の型をつくる爲、中村氏の所から石膏大袋に一つもらつて来る。

六月六日 雨

本日も又雨、私が来てからは雨か曇天が多く、任事がはかどらないので大いにくさる。

松山氏から、中田氏へ其の後の清算報告をしてくれる様たのまれて、手紙も書く。

今日も渋草からの帰りは七時半になる。ここの所ず一と毎日、灯がともる頃にならない
と帰つた事がない。

しかし、これだけ頑張ると疲労しても大いに気分がよい。

生徒一同もよく頑張る様になった。

六月七日 雨

常日の如く両方に出動。

洪草は前日吸がめに上げた土を土捻機にかける。江頭が土捻機の土の世話をしているうちに車に仕事着の袖を引掛け、土捻機と共に一回転引摺られる。驚ろいて飛んで行ってベルトをはずし、幸いに怪我なくしてたすかる。皆に土捻機に近づく時はブルーズの様なふわふわした物は着用しない様に注意する。

本日も主とし鑄込をやる。

夜、松村に中田氏から手紙あり、9日来高の予定なるを知る。

六月八日 雨

洪草に於て、昨日あれ程注意してをいたのに、又石毛が土捻機に引掛けられる。石毛も別に怪我はしなかったが、大いに驚ろかされた。ブルーズを着用すると言ふのに着ていた爲だ。

どうも皆、注意を上の方で聞いてゐる様な所があるので困る。

六月九日 雨

午後、中田氏着高、洪草に来る。

平常より早目に仕事を切り上げ、中田氏と種々其の後の経過について話合ふ。

夜8時40分の汽車にて加藤先生来高。中田氏と共に中井旅館に泊る。明日、津田先生、富山経輪にて来高の予定。

この所、大分賑やかで大いに心強し。

六月十日 小雨時々曇

朝、洪草組の者全部行かけに加藤先生を宿にお訪ねし、先生と一緒に洪草に行く。松山氏の方の窯詰めが本日中に終るので、大急行で、この前の色見中面白い物を先生に抜取っていただき、先生の指導を受け試験釉を造る。又、土物の土としてトチを利用する試験等を先生のおてつだいをし、皆今度は前よりも火度の弱い所へ入れてもらふ。

又、先生に皆の作りかけの物の批評等してゐただく。

夜、津田先生来高。

山下旅館のばあさんの電話の間違ひから津田先生を生徒達と出迎へる事が出来ず、大変失礼をしてしまった。後刻、中田氏より電話あり、小生大いに驚ろき、旅館へ飛んで行き御あいさつする。

六月十一日 曇

昼間は中田氏の御案内で、先生方は市役所等廻られる。

夜、洲崎に松山氏をおよびし、津田、加藤両先生、中田氏、小生にて今度造った窯、作業場等の事に関し相談。大体円満に双方の了解つく。今度の事に関し、先生方の気苦労はズい分大変は事と思はれる。特に中田氏は、自身がこの直接この事の原因に関して居られるだけに、並大程の事ではない様に思はれる。それに付けても是非生徒達の作品の成績を上げ、先生方の努力を徒労でない様にせねばならない。小生も本来ならば、明12日で責任は終るはずであるが、先生方の命により出張を引続き延期する事になった。他の方達よりはいくらか場所や仕事に慣れてゐる以上、是非頑張つて皆の成績を上げる様にしたいものだ。

六月十二日 快晴

皆午前中、各自の部署にて仕事。

津田、加藤両先生、中田氏と共に渋草に来られる。

午後三時頃、指導所の宮川氏と生徒一同にて春慶の福田屋に行き、古るい見本等見る。先生方も来られる。あまり大した物もなく、多少期待はずれでがっかりする。

大島徴兵検査の爲帰郷。

六月十三日 晴

加藤先生に帰京を一日延ばしていただいて、今日もう一度渋草で生徒一同に袋物の造り方と教へていただく。

本日、朝日新聞に講習所の記事が出てゐた。

六月十四日 曇後小雨

朝七時、津田先生、加藤先生、中田氏帰京。生徒一同と駅へ送る。

後各自の作業を行ふ。

六月十五日 晴

本日渋草組は休み。

小生木工組と共に指導所へ行き、代情氏と色々話合ふ。

六月十六日 曇後晴

徴兵検査で帰郷してゐた大島が帰って来る。第一乙種との事。これで今年の連中から一人入営者を出す事になった。大島のお父さんも一緒に来高され渋草で合ふ。

六月十七日 薄曇

例の如くにて変化なし。

六月十八日 雨

もうそろそろ素焼にかからないと本焼が遅延するのではないかと多少あせり気味だが、素焼窯の関係と松山氏の方の仕事の都合でどうなるのか一寸と見当がつかない。

松山氏の方の窯出しにて先日入れた色見出づ。窯の根の方に入れた爲全体に良好。

〔新聞切抜の挟み込みあり〕

六月十九日 曇

木工組曲子職人の西田爲房の所へ仕事をたのみに行く。

昨日松山氏の窯より出た色味を持ち帰り点検するに、前の色見よりは火度の低い所に入つた爲全体に於て色のあがりがい。

加藤先生の所へ送って見ていただかうと思ひ、木工組に箱をつくる様たのむ。

六月二十日 晴

朝突然松山から仕事の都合上明日素焼を窯詰めしてしまふ様話しあり。今日中に今まで仕上げてない物を全部仕上げねばならず、皆大車輪で活動、夜9時すぎまで頑張る。

吾々ロクロ小屋が一先づ出来上った爲、障子を張りかへる。

六月二十一日 晴

早朝より渋草組出勤し、松山氏の弟さんが窯詰めしてくれる。前にのこりの仕事を仕上げ、窯詰めを手助ふ。吾々の作品すくなく素焼窯の半分以下にならんでこまふ。
木工組の連中はヒダ木工へ見学に行く。

六月二十二日 晴

渋草組、素焼。

午前6時火入れ、午後3時50分窯き上げ。薪横5尺7寸、縦5尺3寸使用。終始一完、吾々のみで焼く。上手にあがっておればよいがそればかり気になる。
加藤先生へ試験体発送。

六月二十三日

木工組、しばらく堀氏工場を休むでみたが、今日から仕上げを始める。
渋草組、素焼を出す。意外に成績よく大物で裂れた物は一つもなく、横山の大皿の上になにか落ちてふちがかけただけである。
本日より新しい作業場の方に向つる。
石毛、江頭、佐々、第一回体力検査。

六月二十四日 晴

木工、西田より曲子生地出来上り来る。
渋草、いよいよ絵付けを開始。

六月二十五日 晴

小生、指導所へ行く。代情氏に職人の賃金を月末までに学校より送付してくれるだろうか
と念をおされる。小生は中田氏再度来高の折、度々話してあるから手つづきずみの事と思
ふから大丈夫だろうと答へて来る。渋草へ行く途中、電気会社に行き、南技師に会い配電
の件を出来るだけはやくしてくれる様たのむ。
佐々、江頭、石毛、第二回体力検査。

六月二十六日 晴

木工組の佐々、古藤渋草へ線巻の原型を造りに来る。
渋草組は絵付けにいていそがし。
電気会社より配電の下見に来る。

六月二十七日 晴

渋草組は今日から絵付けのかたわら釉掛けを始める。先づ染付物には出来るだけ安全性の
ある松山氏の方の白釉をかめに一ぱいもらって、それを出来るだけ多くに使用する事にす
る。初窯の爲あまり危険な事をして全部失敗になると困るので安全な方法を取り、中にす
こし異った白釉物、色物をまぜる様にしようと思ふ。
色物に使用する噴霧器を石毛と佐々に堀氏の所へ取りに行ってもらったが、都合悪つくて
駄目。

六月二十八日 晴篠雨あり

木工組は今夜より堀氏工場の都合の為、夜業を行ふ事になる。昼間指導所にて作業し、夜又仕事をするのはずい分大変なことと思ふ。疲労の爲怪我でもせねばよいが、心配になる。

渋谷へ電機会社より工夫達来て午前中に配電を完了。電燈4、モーター1メートルの関係上電燈が多くなった。

午後佐々、堀氏工場より噴霧器を持って来てくれたので、明日より色釉をはじめ様と思ふ。

六月二十九日 晴

職人の賃金のこと心配になり指導所へ行って見たが、代情氏時業中にて会はずに渋谷へ行く。夜帰って見ると、代情氏より手紙にて職人の賃金を立替へた事を知る。

六月三十日 晴

朝指導所に行き、代情氏に会い職人の費用及び曲子・家具の材料代の事につき相談。中田氏の令兄の所に行き、合計236円70銭（82円三枝家具材料、34円70銭西田曲子職人、130円代情氏が中舎に立替へた分）を借用、それぞれに支払ひ、中田氏の依頼の如く書類をまとめて代情氏にあづける。この問題に関し小生多少中田氏の態度に不満を感じず。

佐々、江頭、石毛、体力検査。

七月一日 曇小雨

渋谷組は松山氏工場の方は休みなれど、こちらは窯の都合上早朝より出勤色釉の調合噴付等遅くまで頑張る。

井波は風邪気味にて休養。

夜、加藤先生の所から色味の返送あり。

七月二日 曇後雨

例の如く大奮闘。

夜加藤先生より色釉4種及び釉に対する注意のはがき送付あり一同大いに張り切る。

市長、市会議員等渋谷へ来る。

七月三日 雨後晴

渋谷組釉掛をなんとかして終了さしたいものと夜九時まで頑張ったが不可能だった。

毎日7時半前に帰った事はないが、今日はさすがに疲労した。

この分では予定よりずっと遅れそうだ。

七月四日 雨後晴

今日も終日釉掛けに終止す。

七月五日 雨後曇

遂に釉掛けを終了。自分としては出来るだけの注意をしたつもりだが、経験の浅い事が非常に不安に思はれてしかたがない。

七月六日 雨後晴

空焼。

午前6時火入れ。11時35分一ノ間に初の火見ゆ。午後1時37分、捨間へさし木、後一ノ間へさし木。3時20分第二間へうつる。午後7時完了。

薪材 大なる木 7尺7寸—3尺2寸、5尺2寸—1尺3寸

割木 6尺6寸—2尺7寸

松山吉之助氏に時々見てもらいながら殆んど吾々で行ふ。今日の空焼で薪の入れ方等多いに練習になる。

横山、江頭の二人、何かあたったのか腹痛かなりはげしいらしく一日休養を命ずるも、横山は気になるらしく、午後遅く洪草へ顔を出す。

一同の疲労かなりひどい様子、私自身も何か体中がいたむ。

七月七日 晴

窯詰めの用意、品物を窯のそばへはこび、ヨリ土をトンネルの一向ふよりリヤカーにのせて運搬し土捻機にかける。

白土 48貫900

ボコ土 10箱

七月八日 晴

窯詰め、松山吉之助、今井、大坪の三人仕事を休むんで手伝ってくれる。大体色物は半分以下の所へ入れ白釉、鉄砂を上上げる様に配置す。

江頭は昨日の労働が悪るかつたらしく又腹の調子が悪るいらしいので、本日も休養せしめる。

木工職人休。

七月九日 晴 十日 晴

午前中窯詰め終了。午後1時20分秋葉神社より御神燈を受け窯に火入れす。午後10時頃捨間に火見ゆ。十日午前1時45分捨間にさし木、胴木間へもどり、捨間へ又さし木、胴木へもどる。

午後前3時5分、第二間サマ穴のあり赤くなる。4時10分第一ノ間へさし木、以上あぶりよりねらし。5時、絵出し、以後せめに入る。午後2時32分最後の色見を出し、第一ノ間のせめを終る。

一時間休むで、3時20分第二間にかかる。午後11時焼き上げ。

以上、終止松山氏の弟さんに見てもらひながら皆が交替でさし木をする。皆徹夜と今までの疲労に加へてのやけつく様な熱気とに身心共に疲労す。私達は出来得るだけの努力はともかくもした、あとはただ其の結果を見るだけである。

木工職人休。

薪材胴木6尺3寸—4尺8寸、4尺1寸—4尺1寸。ワリ木115たば。

七月十一日 晴

渋谷組は連日の奮闘につかれて朝寝坊をする。井波は疲労はげしく吐けをもよをすので一日寝てゐることにする。

今日一日窯をふせてさます予定であったが、小生と横山は我慢ならず、午後より出掛け。渋谷に牧野氏が吾々のいない時にこられたとかの爲、松山氏が一の間の口を開けてすこし出して見せた爲、二、三品物が出てゐたので、もう我慢出来ず、まだ熱くてたまらない窯の中に入り、一の間の半分程出してしまった。

大体に於て、並白釉は完全に上り、色釉も天目、伊羅保はよく、金茶台天がすこしとけすぎた感はあるが悪くはない、白マットがどうも溶けてゐないので、津田先生の兎、白鳥が心配になる。明日の二の窯が気になる。

七月十二日 晴

窯出し終了。

昨日の予想の如く、並白の上りは上々。

黒天飴釉は土灰ワラ灰をあわてて水洗せず使用した爲心配していたが、意外に美しく出多いによろこぶ。伊■もよし、ただ金茶台天がややとけすぎて、トチとくつついた物が少し出た。

又マット白釉はほとんど溶けてゐなかった。これは小生の考へ違ひからすこし掛け方がこすぎた爲と思はれる。其れから兎、白鳥は裂れた物が多く、やっと完全と思はれるものが兎一個にすぎなかったのは残念だ。

然し全体として、又初窯とし、未経験のものとしてはまったく上々と見てよいのではないかと思ふ。実際は皆よくやってくれた。ずい分無理でつらかった事と思ふ。だがまったくよい勉強をしたし、よい結果を得た事だ。一同ただこの結果をよろこび合ふばかりだ。

七月十三日 晴

渋谷組は作品をながめながら一日なんとなく休養。夕刻よりアリスより料理の仕出しを取り、渋谷にて吉之助氏、大坪、今井両君をよんで夕食を共にし、大いに語り、初窯を祝ひ会ふ。

中田氏、加藤先生へ窯の結果を速達にて報告す。

松山氏午後3時の汽車にて上京。

七月十四日 晴

渋谷組、上絵付を開始。

代情氏愛知県工業試験所技師峰孝至氏共に渋谷へ吾々の作品を見にくる。

七月十五日 晴

渋谷組は休み。

木工組も午前中のみ指導所にて仕事をなし、午後からは休む。

小生午前中指導所に行き、木工組の作用を見る。

七月十六日

〔記述なし〕

東京藝術大学 未来創造継承センター 大学史史料室（旧制東京美術学校部門）年報
令和6年度（2024）

編集・発行 東京藝術大学未来創造継承センター大学史史料室（旧制東京美術学校部門）
110-8714 東京都台東区上野公園12-8

発行日 2026年2月13日